

ぼくじゃなきゃイケなくなっちゃう蒼葉はとても可哀想でかわいいよ。

完全犯罪

挿話一・脅迫

餌付け。思ってたより楽しい

完全犯罪插話一・脅迫

一・不安

セックスすると満足するまで貪り合ってしまう。

体力の限界も無視して満足するまで絡まり合う。先に力尽きるのはどうしても蒼葉で、受け止める側の快感は深いが体力的負担は否めない。更に、蒼葉の負けず嫌いが悪い方向へと影響して無自覚に旭を煽っている。

毎日とはいかなくなつたものの、セックスの度に蒼葉は力尽きて腹に旭を納めたまましばらく動けない。快感の余韻に浸っていたい気持ちも多分にある。ゆるりと腰を宥めるように軽く叩かれていると気持ちいいことも知った。とんとんと腰を叩く旭の手に、余韻だけで時々蒼葉は達する。

軀に残る余韻が引いて腹の中に納めていた旭の陰茎を抜くと、蒼葉はゴムを外してゆるりと舌で愛撫する。——それでもゴムを使うようになった。セックスの後の愛撫

をしなくてもいいと旭は何度も言ったが、蒼葉はきかない。

汚れたシーツを洗濯機に放り込んで一緒に入る湯船の中で蒼葉はぼやいた。

「……体力、落ちてんだよなあ……」

毎日リハビリでストレッチを始めたが、外に出るでもなく運動らしい運動はしていない。ひとりで走るくらいは問題ないのだが、蒼葉は積極的にしようとは思わない。前髪の中から雫が落ちて湯に波紋を作った。

「蒼葉。それはどういう体力をつけたのかな。セックスで力尽きてしまわないための体力なら……たぶん無理っていうか……体力の分、全部蒼葉はぼくにぶつけちゃうからきりがないよ。ぼくの体力が持たなくなるよ」

「そんな旭も見たい。俺にいいようにされてる旭。いいじゃん、そそる」

「……言うんじゃなかったな……」

背中から抱かれて肩に旭の苦笑が触れる。顔は見えないけれど、穏やかに本当に困った顔をしているだろう。蒼葉は旭が困る顔が好きだ。

旭はもう罪悪感で表情を曇らせない。安定した乳首のピアスに触れては満足そうに笑う。だから、いまの旭が困った顔をする時は本当に蒼葉に手を焼いている時だ。旭

を困らせると蒼葉は子供のような優越感に浸る。

「旭。風呂上がる。のぼせそう」

「うん」

軀を捻って抱き付く腕を絡ませると、頬にキスが落ちた。

脱衣所で軀を拭いて髪を乾かして歯を磨いて、下着だけつけてシーツを交換したベッドと一緒に潜り込む。旭は寝る前に服薬するけれど、蒼葉はもうなにも与えられていない。自然に眠る。明かりを消すとゆるりと楽に絡まって瞼を伏せる。もう同じ匂いになっているはずなのに、蒼葉は旭の匂いを落ち着くと感じる。

同じ洗濯洗剤、シャンプー、コンディショナー、ボディソープ。それでも匂いは違う気がする。

朝目覚めると旭がいなかった。家中のどこを探しても姿が見えずに、滅多に外に出ない旭を珍しいと思いつながら蒼葉は顔を洗って着替えをして、ダイニングでコーヒースを飲んでいた。目が覚める時間はだいたい決まっているものの、特に仕事もなく毎日することと言ったら蒼葉は習慣になったストレッチくらいでなにもない。あまりテレ

じも見なく、パソコンも仕舞ったためひとりだとすぐに手持無沙汰になる。

時計はまだ朝の六時を過ぎたところで蒼葉は普段よりも起きるのが早かった。二度寝をしようかと考えながら飲みきったコーヒーマグのカップを洗っていると玄関の方から音がした。

「旭？ おかえりー」

インターホンも鳴らさずに玄関を出入りできるのは旭しかいないと蒼葉は洗ったカップをかごに置いて水を止めて先に声をかけた。

「……蒼葉、起きてたの」

「うん。旭、おはよ」

「おはよう」

キッチンを覗いて旭は少し顔に驚きと困惑を浮かべたけれど、蒼葉は見なかったことにして朝の挨拶をする。

「旭、なんか飲む？」

「あ。うん。自分でする」

そう言いながら旭は冷蔵庫から水のボトルを出してグラスに一杯注ぐと飲み干し

た。

きつと旭は蒼葉が起きるまでに帰ってくるつもりだったのだろうとうっすらした困惑に蒼葉は想像する。どうしようか。このまま見なかったことにするか、どこに行っていたのか問うか。二択になった。旭は蒼葉にやましいことはしない。日常的な消耗品や食料の買い物以外、ほとんど外に出ない旭が早くからどこかに行っていたのであれば理由は恐らく旭自身の中にある。

蒼葉は少し嫌だな、と思う。

蒼葉は旭の体調のことを少し聞いただけで、自分から踏み込まない。もちろん、旭が自己管理のできる大人だと信用しているからでもある。旭がひとりで外出して蒼葉が文句を言う理由はない。けれど――少し、心配した。過労と不眠。旭が仕事を辞めた原因。過労は休めばいいだろうけれど、不眠に関しては旭は薬を飲んでいない、今日は蒼葉よりも先に起きてどこかに行っていた。

「旭さ、どこ行ってたの？」

洗い物を済ませて、リビングのソファに埋もれるように座ると蒼葉は何気ない口調を装って訊いた。

Tシャツにジャージのハーフパンツだけの軽装。ほんのり香る汗。ランニングでもしたのだろうと察しはつくけれど、ほとんど外出しない旭がそんなことをしていると蒼葉は知らない。

「昨日、やり足りなかった？」

「蒼葉、怒ってる？」

「……違う。ごめん、嫌な言い方になった。起きたらいないから、少し、心配しただけ」
無意識にシャツのピアスの場所を握って蒼葉は返事した。疑ってはいないけれど、旭の言わないことを詮索する自分は嫌だ。しかし、まだそこまでわかったふりなどできない。

「蒼葉」

隣に腰を下ろした旭の温度が僅かに高い。触れなくてもわかる。

「少し走ってきただけだよ。本当にそれだけ。早く起きすぎちゃったから、気分転換だったんだ。すぐ帰ってくるつもりだったんだけど……蒼葉、ごめんね」

「いい。本当はそんな見りゃわかるのに、わざわざ訊いた。あんたを疑ってるんじゃない」

「ぼくはさ、あまり自分のことを話すのが得意じゃないから蒼葉に嫌なこと言わせちゃうんだよ。だから、蒼葉は怒っていいよ。時々、上手く寝れなくて夜中に起きたり、早く起きちゃったりして……走りに行つてた。いつも蒼葉が起きる前に帰つてただけで、本当にただの気晴らし」

旭の言葉を聞いて、蒼葉はどうしてもそのまま頷けなかった。この男はまだ隠そうとしている。蒼葉に関わることでないからと、旭は線引きをする。

「気晴らしってなんの気晴らし？　ちゃんと寝れなくて溜まつてんのを走つて紛らわしてんの？　そういう種類のやつ？」

前に一睡もしない旭とめちゃくちゃなセックスをしたことを蒼葉は思い出す。いまのセックスがまともだとは思わないけれど、その時の旭の欲求は別物だった。

「なんで俺に言わないの？」

ぎゅ、と胸の上を握つたまま蒼葉は顔だけを旭に向けた。

「本当にただの気晴らし。蒼葉が気にしている種類の気晴らしじゃないよ。言わなかったのは、ごめん。ぼくは……蒼葉に甘えてるんだ。怒って、拗ねて欲しかったのかも」「馬鹿なの。旭の方が大人じゃん」

「そうだけど、蒼葉がぼくを急かさないようにしてくれてることに甘えてる」

旭は困ったような嬉しいような顔で穏やかに言う。蒼葉はもう一度「馬鹿じゃん」と言い返した。勝手に疑って勘ねているのは蒼葉なのに、甘えてるなどと言われるとそれ以上怒れない。手を差し伸べるほかに選択肢がなくなる。

「それで、走ってすつきりすんの」

「うん。体が疲れるから汗流して二度寝したい」

「まだ早いし、俺も寝る」

「うん。シャワー入ってくるね」

蒼葉が折れると、旭はほっとしたように普段と同じようになって浴室に向かった。

昨晩は寝る時間が遅くて蒼葉もまだコーヒーを飲んだくらいでは眠い。どうしてもセックスすると寝る時間が遅くなる。悪いとは思わないが、怠惰な生活だという自覚はある。ただし、時々、自分にずっとこんな生活が続くわけではないと蒼葉は言い聞かせている。

あくびをしながら寝室へ向かい、カーテンをかけ直してベッドに潜り込んだ。まだ上手く言えない感情が蒼葉の中に揺蕩っているが、言語化できない以上はまだ口に出

せない。上手く言えないということは感情の整理がついていないと蒼葉はもやもやする気持ちを追い払った。

しばらくして旭がシャワーを終えて蒼葉の隣に滑り込んできた。ほんのりと汗ばんだ匂いが消えて、同じボディソープの匂いがする。ふと、旭の汗ばんだ匂いなどセックス中にしか嗅いだことがなかったのだと蒼葉は気付いた。だから、旭に違和感があったのだ。

「旭。俺のストレッチさ。専門じゃないって言いながら一緒にやってくれんじゃん？　なんかやってたの。さっきも走ってきたって言った」

なんとなく思い付きのまま言うと、旭は困ったような表情を見せた。困った顔で誤魔化そうとするのは年上の悪い癖かと蒼葉は旭を引き寄せた。

「うん。スポーツは昔やってたけど、いまはやってない。でも、昔やってたのと専門じゃなくても一通り勉強してるから多少できるだけだよ。それだけ」

「なにやってたの」

「サッカー」

旭は短く答えると瞼を伏せてしまった。

あまり触れられなくなつたのだろうかと思ひながら、蒼葉もそのまま瞼を伏せた。まだ朝は早く、ベッドに入ると眠りに誘われる。

蒼葉が目覚めて時間を見るとまだ朝の八時過ぎだつた。二時間弱は寝たらしく、蒼葉は足りない睡眠を補つてすつきりしているが、隣の旭はまだ眠っている。

外の明るさをカーテンが完全に遮れず、隙間から差し込む光に旭の寝顔が見える。光の加減か目の下にくまができていようにも見えて、蒼葉はそこをそつと撫でた。上手く眠れずに早く起きたと旭は言っていたが、何時に起きて走りに行っていたのか蒼葉にはわからない。葉を飲んで眠っているのにしっかりと眠れていないのなら、旭には無意識に抱えるストレスやプレッシャーがあるのかもしれない。少なくともプレッシャーはあるだろう。

過労で疲弊して仕事を休んだ末に退職して、いつ復職するのかとは考えるだろう。そんなことは考えなくてもいいと言つてやりたいが、いまの蒼葉は経済的にも旭に頼っている無職でそんなことを言えるような立場ではない。

旭は仕事に疲れて休みたいと辞職したが、きつと落ち着けば仕事に戻るだろう。問

題は蒼葉の方だ。編入した通信制大学すら休学して旭の傍に在るけれど、そもそも大
学自体特にやりたいことも学びたいこともなくぼんやりと選んだせいで、将来なにに
なりたいたのかかわからない。一般的なサラリーマンになるのだろうかと思いつつ考
えていた。けれど状況が変わった。

旭は外科医で、働く病院の規模にもよるだろうが転勤の伴わない仕事だ。蒼葉が一
般企業に就職したとして、企業の展開規模によるが転勤の可能性があるならば嫌だと思
う。好きだから離れたくない。そして、旭を置いて蒼葉がどこかに短期間でも離れ
るのであれば——心配だ。

年上の既に自立した男に、まだ自立さえしていない蒼葉が心配だというのはおかし
いのだが、どうしても目を離す可能性を考えると不安になる。気持ちが離れるとは思っ
ていない。ただ、旭の心が不安定になるのではないかと心配になる。

こうしてなにもしない日を送っている間は、ただの怠惰ではなく旭と一緒にいるた
めに次にどの選択をするか考える時間だと蒼葉は時々考える。ふたりでいることは当
然になった。それでも互いに不安だった時期は過ぎた。その次は、どうやったら一緒
にいるまま生活の基盤を固めるかになってくる。働かないことにはいつか持っている

金も底をつくのは当然なのだから。

適当なアルバイトをして稼ぐのでは蒼葉は納得いかない。自分ひとりならば構わないかもしれないが、旭と一緒に、復職したあとの旭がまた過労になる可能性を捨てられない。ならばせめて安定した職につきたいと思うが、蒼葉にはまだ自分がなにをしたいのかなにに向いているのかがわからない。ぼんやりなんとなく、先のことを考えない選択をしたつけどから仕方がない。

うつ伏せになって蒼葉はベッドの枕元に置いてあるスマートフォンを取って無線イヤホンを片耳にはめた。最近の蒼葉の暇つぶしは大学の講座を興味のままに聞くことになっていた。元々、決して勤勉な学生ではなかったが、在籍していた学科は目的があつて選んだものではない分、どうにか自分の現状を変える糸口を探す気持ちだった。興味のままに講座を選んで聞くと、自然と心理やスポーツ科学、健康に関する講座が増えてしまった。

テキストもなしに聞いているだけの状態は内容を理解するまでには至らず、ただ漠然とそういうものかとしか把握できないが、在籍していた学科の講義よりもずっと興味はある。ドメスティックバイオレンスに関わる講座を聞いて、自分は被害者の気

持ちで旭を好きと言っているのではないと確かめられる。心理学の講座を聞いて、気持ちを持ちを操られていないと否定できる。そんな単純な動機から聞く講座もあれば、スポーツ科学や健康関連の講座では自分の愚かさを反省した。

旭はきつと早くから起きてしまったのだろうと蒼葉はベッドを出ずにそのままイヤホンで講座を聞きながら、時々戯れに旭に足を絡めては離してイヤホンから聞こえる年配の話し声に耳を傾けていた。

「……蒼葉……」

ふと呼ばれて蒼葉はイヤホンを外して旭の方へ顔を向けた。まだ旭は眠っていて寝言だったけれど、寝返りを打った片手が伸びてきてなにかを探している。蒼葉は「馬鹿だねえ」と言いながら旭の手を捕まえて外したイヤホンを戻した。

講座をひとつ聞き終わって次を聞くかどうか考える前に蒼葉は捕まえたままの旭の方を見る。すると旭は目を覚ましていて、蒼葉の片手に掴まれたまま寝起きの顔で穏やかな視線を向けていた。

「いつ起きたの、旭」

「ちよっと前。蒼葉が手、握ってくれてて……なんか嬉しかった」

「馬鹿なの」

つい癖で蒼葉は照れ隠しに「馬鹿」と言ってしまう。きつとそれを旭は理解していて、握った手を握り返してくる。

蒼葉は片耳のイヤホンを外して、枕に突っ伏してしばらく考えてから旭の方を向いた。ベッドの中の方が言い難いことも言えるような気がする。

「あのさあ、旭。あんたのこともっと教えてって言ったら、嫌？」

「それって誘ってるの？」

ふふ、と笑って旭は蒼葉の手を引き寄せようとしたが、蒼葉は引き留めた。

「はぐらかすな。はぐらかすってことは嫌なんだろ。ちゃんと見えよ」

力でかなわないことを知っても、蒼葉は引き寄せる手に抗議して真っ直ぐ旭を見つめる。旭から柔らかく笑う表情が消えた。けれど、穏やかさはそのまま残っていた。困ってもない。

「怒らないで、蒼葉。冗談だよ。はぐらかす気はなかったんだよ。ごめんね。……いいよ。蒼葉はぼくのなにを知りたいの」

「俺の知らないこと全部」

端的に言うともあまりに漠然としすぎて蒼葉自身も伝わらないと思う。けれど旭は「蒼葉は欲張り」と少し笑った。

「眠れないのって、どんな感じ」

「最初のうちは、すごく集中力が高くなつて思考が研ぎ澄まされて疲れていることもわからないし、なんでもできるような気がする。睡眠なんて無駄なんじゃないかって錯覚しそうになる。でもそもそも不眠つてなりたくてなるんじゃないかって、忙しかったり無茶して遊んだりそういう環境が重なつてなるものだから。一晚や二晩の徹夜でなるものじゃない。徹夜のハイテンションはいつまでも続かないでしょ。体が先に疲れる。でも寝ない状況が続いていて、やっと眠れるようになって……今度は眠れない。寝ていない時の全能感なんてまやかして、ほんの少し脳みそを誤魔化してるだけだ。過度の睡眠不足が続けば判断力は落ちる。集中力もなくなる。いつも頭に靄がかかっているような感じで……眠つてしまいたいのに眠れない状態になるとマイナスイライルにもうはまってしまつて、抜け出すのは難しい。だから、ぼくの場合は過労と不眠がセット」

「マイナスイライルってどういうこと」

ぼつりと蒼葉は訊いた。その中には蒼葉を監禁したことも含まれているのだろう。

「おかしくなっちゃうんだよ。正常に判断してるところだと思ってることが間違ってる。疲れている時にうっかり簡単なことを間違っちゃうことがあるでしょ。それが極端に酷くなる。カルテの記入ミス、処方ミス、そういうことがぼくには命取りになる」

そんなことから旭は仕事を休んでいたのかと蒼葉は納得した。確かに医者ならばミスひとつが危険に繋がりがかねない。

「——オペが怖くなった——」

「俺が訊いたのにごめんんだけど、あんたのことどうやって慰めたらいいかわかんない」

その一言が重くて、蒼葉は硬い声で言った。手を伸ばすことも安易な言葉も臍もきつと役に立たない。本質を解決せず、理解もしていない。その場だけの上辺でわかったふりをするくらいならば素直な感情を返した方がいいと思った。旭は穏やかに笑った。「大丈夫だよ、蒼葉。ぼくはぼくを危ないと思ってるから、いま休んでゆっくりして治そうとしている。仕事が忙しくてどうしようもなくなっても、ずっと心に引っかけたて気になつてて好きな子がいまぼくといてくれる。オペを怖いと思ったのは本当

だし、医療ミスをする前に休んだ。医者を続けたいからそうしたんだよ」

「寝れないで走りに行くなら付き合ってから起こせよ。走るの嫌いじゃない」

「蒼葉がぼくの不眠にまで付き合わなくていいんだよ。……ああ、でも、そっか……」

妙に納得した顔をして旭はひとりで呟いた。蒼葉がなにかと先を促すと、握った手が寄せられてキスが落ちた。一瞬、誤魔化されたのかと思ったが、そうではなかった。「夕方、走るようにしようか。朝だと同じ時間に毎日ちゃんと起きるのは難しいし、ぼくと蒼葉の生活リズムだと夕方の方がいいよ。ストレッチした後、走ったら蒼葉にもちようどいいよ。ぼくにも」

「俺に都合がいいのはわかるけど、旭のはわかんないから説明して」

蒼葉は提案に半分頷いて、半分問いかけると旭はにこりと笑った。

「ぼくはずっと気が進まなくて、早い時間に起きた時に時間を持て余して走ってただけけど、本当は昼間に日光を浴びて軽い運動をするのが不眠には効果があるんだ。日光浴だけでもってよく言われるんだけど。だから、蒼葉とストレッチした後には走らんだったらぼくにも悪くないことなんだよ」

「……外、出たくないんじゃないのかよ」

必要な時以外、外出しない旭に蒼葉は訊いた。てつきり、なにか外に出たくない理由があるのかと思ひ込んでいた。

「積極的に出たくはないけれど、深夜や早朝に蒼葉を置いて行くくらいなら一緒に走りに行く方がいいと思つた。ぼくにも蒼葉にも都合がいい。蒼葉だつてストレッチだけより、軽い運動だつてした方がいいよ。体力つけたいんですよ。それとも、四六時中べつたりしているのは嫌かい？」

「嫌じゃないし、旭がいる方が安心する。けど、無理に付き合わせるのは嫌」

蒼葉はリハビリのストレッチを習慣にしているけれど、ひとりでは行かない。まして、走りに行くなどしない。アルバイトを少しやつていた時も事務の手伝いで、肉体労働ではなかった。

足の怪我は日常生活に支障が出るほどではないが、天気が悪いと傷跡は痛む。いきなり運動をしていいのか、怪我をした時の激痛を思い出すと気後れしてしまう。そうやって、運動と結びつくものをずっと遠ざけてきた。

「無理じゃないって言つたでしょ。ぼくにだっていいことなんだよ。だから蒼葉はさ、ぼくの我儘に付き合つてよ」

ふふ、と旭は悪戯気に笑う。

もちろん、蒼葉も旭が外に出ることを悪いとは思っていない。提案も嫌ではない。それでも上手く言えない何かが引つ掛かつていて、素直に頷けない。なにが気になるのだろうと考えていると、ふと握ったままだった手が解かれて旭に頭を撫でられた。

「蒼葉がうんって言うてくれないのは、たぶんぼくが勝手に蒼葉を置いてどこかに行っていたことを心配した気持ちとぼくの自由を尊重したい気持ちがあるからだよ。一緒にいれば安心するけれど、大人の男がふたりして四六時中一緒にいないと生きていけないなんてない。ひとりになりたい時だってある。矛盾した気持ちだけど、そういう小さな矛盾はよくあることだから、ちゃんと言うて欲しい」

「あー……うん。うん。ちよつと待つて。なんかわかりかけた気がするから、ちよつと待つて」

手が解放されて蒼葉は頭を抱えてベッドで寝返りを打つと、しばらく考えた。旭の言葉が腑に落ちた。それだけではなく、喉に刺さった骨が取れたようにすっきりした。けれど、それを伝えることは難しい。

「上手く纏まんないから、ぐちゃぐちゃなまま言うていい？ あのだ、朝起きて旭が

いなかったの、心配した。なにかあったのかと思った。それから……俺はそういうの詳しくないから知らないけど……俺で足りなかったのかとも、思った。あんたの自由とかそういうの、あって当然だよ。クソみてえな束縛したくねえよ。でも、疑ったんだ。帰ってくるって自信は持てても、あんたが俺に満足してるかどうかなんてわかんねえから、みみっちいのわかつてるけど疑った」

背中を向けて両腕で顔を隠したまま、蒼葉はぼそぼそと言った。格好悪いなと自分に腹が立つ。物分かりがいいふりをしていたのはなにも旭だけではなかったのだと、今更気付く。

「女々しくてダサ……」

ぼそつと呟くと背中旭の手が伸びてきた。

「ぼくがほかの男をキープしてると思ったの」

「そーなるね。態々確認すんなよ。マジで自己嫌悪してんだよ」

言えと言われてもやもやした感情の正体を吐ききったのに、旭はなにも言わずに頭を抱えている両手をあつさりと解いて抱き寄せると、耳にキスを落として片手で額を持ち上げると逆手の指で蒼葉の唇をなぞった。耳に落ちるキスが耳朶と軟骨を舐めて、

蒼葉は唇をなぞる指に抵抗できずに上向きのまま口を開く。

どうしていま、とも問えなかった。

耳に舌が這うたびにかすかな水音が鼓膜を揺らして、簡単に興奮してしまう。口をあければ長く細い指が口内をたつぷり撫でて深くなる。言葉が封じられて呻き声しか出ないのに、その声に熱がこもる。

「あ……あ、う……っ」

「蒼葉。苦しいのも痛いのも気持ちよくなつて可愛いね。怒つてたのに気持ちよくなっちゃつて可愛いね。イけるようにしてあげるから、いっぱい気持ちいい顔見せて」

旭の額を押さえる手が強くなつて顔を上げられると、口を塞ぐ指が深くなつて舌を強く押し付けながら根と喉の合間を撫でる。耳朶に歯が立つ。びくりと蒼葉は震えた。ぞくりとして旭の剥き出しの気持ちいが垣間見えた気がする。

「う……あつ……！ あが、っ！ あつ」

喉を撫でる手に抵抗の呻き声を上げて、蒼葉は苦しさに涙が滲む。

喉を塞がれて撫でられて達することも、耳を責められて達することも知っているのにほの暗い恐怖心がある。躰は苦しさも痛みも快感にして高まるのに、気持ちはどこ

か怖いまま蒼葉は追い詰められる。

唾液の溜まる喉奥をぐちゃぐちゃに撫でられて、呼吸を塞がれて軀は勝手に痙攣してそれだけで達する。耳にきつく噛みつかれた痛みも愛おしいのに、どうしてか犯されていた時の恐怖心と似たものを感じた。

あっけなく達した蒼葉の口からゆっくりと指が引き抜かれて、咳をしながら激しく短い呼吸を繰り返していると額を押さえていた手が蒼葉を撫でた。

「蒼葉。ずっとずっと蒼葉のことばかり好きで、こんな酷いことをしても苦しくて痛くて気持ちいい顔でイッチャうようになつてくれて、蒼葉のことしか見てないのに、ぼくがほかの男をキープする必要があると思う？」

後ろから静かな声が蒼葉に降ってくる。

げほ、と咳をして蒼葉は小さく「ごめん」と言った。予想でしかないが旭にとってほかの男はただの道具だったのだろう。それくらい旭は最初から蒼葉のことしか見ていない。逆鱗に触れたわけではないだろうが、真っ直ぐな気持ちをぶつけられて剥き出しの独占欲に恐怖心が反応した。

達したあとなのに余韻に浸るよりも、突然崖から突き落とされたような落差の激し

い感覚と感情が噛み合わない。時々、ひくりと震える躰は快感の名残なのに恐怖心を見透かされそうで膝を抱える。

「あんたが俺をこんな躰にしたから、女々しくなるんじゃないか……。あんたがいないと駄目な躰にされてんだよ。好きより深刻なんだよ。もう、あんたじゃねえとイケねえから……。心配じゃなくて疑いになるし、怖くなるんだ」

アルコール中毒者のようだな、と蒼葉はふと言いながら思う。中毒なら仕方がない。旭という男の中毒になつてゐるのなら納得できる。なにを投げ打つても旭を一番に選ぶ。好きという感情よりも傍にいない不安や恐怖が勝つそれは、もう恋愛感情ではなく歪な執着かもしれない。躰に覚え込まされた快楽に振り回されて求めるだけかと思うとぞつとする。

なのに、首筋にほつとした旭の息が触れて、蒼葉にはなにもわからない。

「蒼葉が大好き」

「俺は、たぶん旭がいなくなったらおかしくなる」

膝を抱えたまま呟くと、するりと旭の手が忍び込んできてシャツの上から右乳首のピアスに触れた。

「いなくなると思うんだ」

「そんなことないって思ってたけど、あんたがいなくて怖かったから……そういうの嫌だ」

「もうしないよ」

静かで穏やかな声に蒼葉は軀を緩めて寝返りを打った。手を伸ばして旭の背中に回して、安堵の息をつく。

「俺にもあんたにもいいことなら、全然いい。なんでもいい。……なんでもいいから、俺にあんたを疑わせんなよ」

「蒼葉は案外怖がりだね。ああ……でも、ぼくがちゃんと言わないから悪いんだよね。先に言っていればよかったんだ。ごめんね、蒼葉」

「あんたにも首輪つけよっかな」

右乳首のピアスを思い出しながら蒼葉は呟く。ピアスでもなんでもよくて、ただ思いついたただけだ。

「蒼葉が？ ぼくに？ そんなことしたいの」

単なる思い付きなのに、旭は蒼葉を強く抱き締めてきて嬉しそうに耳元で笑う。

「なんでそんなに意外そうなの。あんたは俺に首輪つけといって、俺がするのは駄目なの」
「駄目じゃないよ。嬉しい。蒼葉がぼくを繋ぎたいと思ってるの、すごい」

「たぶん、俺はあんたが思ってるよりももうずっと好きで、ハマってて抜け出せない」
思ったままのことを言うと、旭はしばらく黙っていてそれから腕を緩めて頬にキスをしてから蒼葉の手を引いて起き上がった。時間はそろそろ昼に近い。先にベッドを降りた旭は窓のカーテンをあけてから蒼葉を振り返った。

「……酷いこととして蒼葉の気持ちを無理にぼくに向かせたと思ってるよ。忘れてない。だから、蒼葉がぼくに首輪をつけたいって執着したり疑ったりしてくるのが嬉しいって言ったら、きっと怒るんだろうけど、やっぱり嬉しいんだよ。ぼくは罪を犯したけれど、後悔していない。いまがとても幸せだから」

穏やかに柔和に旭は笑う。

「ここまでしといてあんたが満足してないとか言ったら、一発ぶん殴ってた」

ふ、と蒼葉もつられて笑った。冗談めかしたけれど、本気だ。

こんなところまで来て、なにもかも違う環境になつてろくな友人知人もなくふたりきりで満足しないというのなら、一発くらい殴らないと蒼葉の気が済まない。どれだ

け閉じ込めたいのかと呆れてしまう。けれど——それでも旭の独占欲に付き合っ
てしまおう。

二・変化

「そうだ、蒼葉。靴。走る用の。買おう」

毎日三十分と時間を決めて習慣にしているストレッチをしている最中に思い出した
ように旭が言い出して、蒼葉は首を傾げた。

「スニーカーあるけど」

「だから、走る用の。ソールが厚くて足に負担少なくなるやつ」

「んー……普段からバッシュだけど、楽だよ」

「ああ、そっか。機能的だね。じゃあ大丈夫かな。蒼葉ってさ、ポジションどこだっ